

Carson McCullers

——孤独と愛について——

江 口 裕 子

序

「人生とは孤独であることである」と Hermann Hesse はいつております。人間はそれぞれことなつた魂をもつて生れつき、閉された自我として生きる孤独な存在であります。私どもは集団のなかの個人として、無数の人々にとりまかれ、多くの人々と接触する生活をしておりながら、本質的な意味では、なんらお互いの運命に関与することなく、時々刻々、時の流れに運び去られる偶然の出会いをくりかえしているにすぎません。そして、一見複雑ながらみ合いをもつた人間生活のなかで、日常的な自己の底に埋没している自分の存在の孤独が深淵のようにぼつかりと口をあける時があり、私どもは怖れのために慄然とさせられます。時として私どもは夜なかや暁にふと眠りから覚めた瞬間、名状しがたい空虚のなかに自分の全存在が浸つているという経験を持つことはないでしょうか？ その感じ自体は、さびしさとか悲しさとかいう言葉で現わし得る状態ではなく、そういった日常的な気分や感情以前の、自分の存在そのものが空無であるというより致し方のない感覚であります。けだし眠りから覚めた瞬間は、日常的な人間の関係や、出来事の継起から全く遊離した状態、いわば日常性と日常性の断絶した裂目におちこんだ状態にあり、完全な孤立の状態にあるわけがあります。そして、この瞬間の虚無の感覚こそ、人間存在の真実であつて、日常的な自分をみたしているすべての条件はことごとく虚妄であると信じ

させるほど、それはふかく存在そのものに根ざした感覚であります。もし言い得るならば、その虚無感は死にもつとも近い感覚であり、次には、生きている自分の絶対的な孤立の感覚であります。そして、その実感のふかさ故に、存在することへの鋭い恐怖と不安におそわれずにはおれません。

孤独感、又私どもが得がたい愛情で結ばれていると思う人間同志の間においてさえも減少するものではありません。むしろ愛によつて心のつながりの鞏固さを確認しようとする時ほど、孤独感、ふかまるものであります。なぜなら、魂と魂との間には克服しがたい深淵がよこたわつており、人間の愛も魂と魂をつなぐ崩れやすいかりそめの架け橋の役をするにすぎないことを自覚させられるからであります。それにも拘らず、否それ故にこそ孤独はたえず医されることを願わずには居れない魂の傷口となるのです。孤独は、閉された自我から他の者のなかに歩み入る願いを痛みとしてもつ魂の宿痾の如きものであります。

人は自分の存在について、思いを潜めるときは、この魂の病いである孤独ということに立ちもどらざるを得ません。これから私の述べようと思う Carson McCullers も孤独ということに深い関心をもち、孤独な人々の心をたえず、さまざまな角度から描かずにおれない作家であります。孤独がつねに彼女の心の中心を占める問題であるかのように、この主題は作品ごとにくり返されて、あたかも孤独を refrain とする幾聯かの詩のように、彼女の全作品に一つの統一をあたえております。McCullers はこの主題のもとに、生れながらの鋭い詩的感受性を照射した異色ある文学世界を創り上げている作家であります。

I. McCullers の伝記と作品

Carson McCullers は一九一七年二月十七日に、南部 Georgia 州の Columbus に Lamar Smith 氏の娘として生れ、父はかつてアメリカに亡命したフランスのユグノー教徒の末えいであり、母方はスコットランド人の血をうけついでおります。幼少の頃から音楽を愛し、将来はコンサー

ト・ピアニストとなる野心をもっていました。この音楽への趣味は「心は孤独な獵人」や、「結婚の一員」や「神童」のなかの少女の中に描かれています。十六才の頃から物を書きはじめましたが、最初は劇に興味を持ち、当時傾倒していたのは Eugene O'Neill であつたと言っております。“This first masterpiece was thick with incest, lunacy and murder. The first scene was laid in a graveyard and the last over a catafalque.”と、習作時代に書いた劇のことを回顧している所を見ると、後の「金色の目の映像」などに濃く現われてくるゴシック小説的なものへの関心が既に見られます。

十七才のとき Columbia 大学と Juilliard 音楽院で学ぶため初めて New York に出て来ましたが、二日目に地下鉄の中で授業料をそっくり紛失してしまい、そのあとは方々で賃仕事をしながら夜学に通います。田舎出の小娘に New York の刺戟は強すぎたらしく、勉強には一向身が入らず、初めて雪を見て感激したり、埠頭へ行つて外国旅行を夢見たり、この時代は所謂青春の放浪期だつたようです。その頃、Story 社が彼女の短篇を二つ買ってくれたのが、本格的な創作生活へのふみ出しとなりました。一九三七年には Reeves McCullers と結婚し、その後二年ほど North Carolina に住んでいる間に出世作の「心は孤独な獵人」*The Heart Is a Lonely Hunter* を書き上げました。この作品が一九四〇年に出版されるや、その年に出た諸作品の中で賞讃の的となり、その強烈な個性や年に似合わぬ円熟性の故に「神童」とうたわれて、将来性を期待されるようになりました。当時彼女は二十三才の弱年でありました。

This is a sit-up-and-take-notice book for anyone to write, but that a girl of twenty-two(?) should be the author makes hay of all literary rules and regulations. Miss McCullers writes as if she had been finding out things and people for herself. A unique accent in first novels is the one thing reviewers have been praying for, and hearing but rarely. Here is a new voice speaking about new American spiritual country.

という Clifton Fadiman の批評によつても、彼女の文壇への登場がいかに異彩を放つたかがうかがわれます。

この作品は一九三八年から三九年にかけて、奥南部の工場町に住む一群の人々を描いた作品で、啞の John Singer を中心として、破産しかかっている下宿屋の娘 Mick Kelly, 資本主義の弊を説いて社会改造の夢をもつ Jake Blount, ニグロ人種の優生学上の改善と社会的向上を一生の使命とする狂信的な黒人医師 Copeland, 性的不能者で変り者のすきなカフェの主人 Biff Brannon を主要人物とした、かなり大きな社会的風景をもつた作品であり、題名の示すように心の結びつきを求めては挫折するさびしい人々の姿を描いています。

一九四一年には、第二作「金色の目の映像」 *Reflections in a Golden Eye* を出していますが、背景をやはり奥南部の陸軍駐屯地にとり、Penderton 大尉という変質的な一将校、その放縦な美しい妻、彼女と情を通じている上官、その病弱な妻との間の家庭的なトラブルに絡ませて、大尉の妻に憧憬を抱く William 一等兵、彼に対する大尉の倒錯的な恋情を取扱い、最後は大尉が一等兵を射殺するにいたる物語であります。登場人物の pathological な性格や、姦通、狂気、殺人、犯罪、性的倒錯というような異常な題材にみち、無気味な雰囲気をもつたこの作品には Faulkner に通ずる要素が濃く、この点では古くは Poe から Faulkner にいたつて開花し、さらに Capote の幻想の世界にもつながる南部ゴシックの伝統をふまえる作品といえるでしょう。この作品が、恐怖と嫌悪をひきおこすような題材を扱っているために、その病的性を攻撃する批評家もあつたのですが、Tennessee Williams はこれを弁護して、

... there is an absolute mastery of design. There is a lapidary precision about the structure of this second book. Furthermore I think it succeeds more perfectly in establishing its own reality in creating a world of its own, and this is something that primarily distinguishes the work of a great artist from that of a professional writer.¹

と高く評価しております。

McCullers は一九四〇年には the Bread Loff Writers' Conference の奨学金を、一九四二年には Guggenheim Foundation の奨学金と、一九

¹ McCullers, Carson, *Reflections in a Golden Eye*, with introduction by Tennessee Williams, New York, Bantam Book. 1958. p. xv.

四三年にはアメリカ芸術院 the American Academy of Arts and Sciences の文学賞を得ております。

一九四五年の「結婚の一員」*The Member of the Wedding* は第二作を凌ぐ佳作であり、McCullers の真髓を発揮した作品であります。彼女はこの作品を自分で脚色しており、この劇が一九五〇年 New York の Broadway で上演されるや、その年の劇シーズンのヒットとなり、Donaldson 賞と New York Dramatic Critics 賞とを与えられております。彼女は世間的な意味では劇作家として成功した形であります。この作品は、母のない孤独な少女 Frankie の兄の結婚式に対する心理的情緒的な反応を、思春期の動揺のなかにとらえたものであります。Frankie は「心は孤独な獵人」の Mick の延長であり、situation もほぼ同一であります。その内面世界はさらに深化され、より鋭い内観力をもつて描かれております。McCullers 自身も、この劇の上演に際して、

The Member of the Wedding is unconventional because it is not a literal kind of play. It is an inward play and the conflicts are inward conflicts. The antagonist is not personified, but is a human condition of life; the sense of moral isolation.¹

といっているように、原作も殆ど筋らしい運びといつてない作品で、主要人物は主人公の Frankie Addams と、彼女を母親代りになつて世話をする黒人 Berenice Sadie Brown、六才になる従弟の John Henry のみで、この三人の台所における対話が物語の主要部分を占めており、いわば「気分」を中心とした作品であります。しかるに、この平凡な日常生活の場面も、作者の特異な感受性のレンズをとおすと、まるで異つた世界が再現します。それはデフォルメされた、しかも異常に美しい感覚印象の世界であり、ゆらぐ水中からヴェールとおして見るような不思議な非現実感がただよつております。John Mason Brown がこの劇の批評で、

Quite aside from the magical performances its production includes, it has a magic of its own. The script shines with an unmistakable luster. Plainly it is the work of an artist, of an author who does not stoop to the expected sten-

¹ McCullers, "The Vision Shared," *Theatre Arts*, p. 30, April, 1950.

cils and who sees people with her own eyes rather than through borrowed spectacles.¹

とのべているように、人物への approach といい、対話にひらめく sense といい、他の作家の追隨を許さぬ彼女独特の気分と雰囲気をもった作品であります。

一九四六年 McCullers はふたたび Guggenheim 奨学金を得てヨーロッパに渡り、一年間 Paris に滞在して、彼女の詩的感性を培った Baude-laire, Rimbaud, Stendhal 等の作家を再発見したといわれています。

一九五一年に Houghton Mifflin 社から出版された作品集「悲しきカフェの譚歌」*The Ballad of the Sad Café* は、前記の三つの作品の外、未発表であつた標題と同名の作品、その他六つの短篇をおさめています。「悲しきカフェの譚歌」は孤独という主題を伝説譚のなかに描き入れ、散文詩風のエピローグで結んだ美しい形式をもった作品であります。主人公の六尺ゆたかなすがめの Amelia 嬢はせむしのいところに寂しい愛をささげ、彼女を恋した美男子で悪党の Marvin Macy は結婚後十日で家を追い出されるし、せむしは Marvin に執着してあとを追ひ廻す、といった風に、伝説風な人物のまわりに喜劇的な plot を仕組み、意表をついた着想を用いてお伽噺として十分な面白さをそなえておりますが、読み終つてみると、筋も人物も背景もすべてが、作品の底を流れる主題を象徴していることに気がつきます。wry humor と pathos を織り交えた詩情ゆたかな名篇であります。Donald Richie 氏は次のようにこの作を批評しております。

「彼女が小説を形成する時に用いる形式は、彼女の芸術に重要な役割をもつ。『悲しきカフェの譚歌』はこの点で最も見事な作品である。素材を伝説譚にとり、その時代史的叙述の平易な雰囲気をつたえて、そこに真のアメリカ風譚歌^{バラード}を時代と場所の特性さえ超えた姿に構成している。彼女は一方で空想談^{ロマンス}をつくりながら、同時にその筋を全く感情の骨格の見えるほ

¹ Brown, John Mason, "Plot Me No Plot," *Saturday Review of Literature*, p. 27, Jan. 28, 1950.

ど洗い出す。そこで人物たちは非常に生き生きした、そして豊かな喜劇的半神像の姿を帯びる。その手法は実にすばらしいものであり、またこの作家は全く気どらぬ態度で叙述をすすめるため、読者は感動させられると同時にたのしまされるのである。」¹

McCullers はヨーロッパの外遊から帰つて、再び New York に居を構えましたが、一九五三年には夫君と死に別れ、Donald Richie 氏によれば現在は自分も不治の病に冒された身を養いながら、執筆をもつづけているようであります。この作品集以後の創作は、大てい *Mademoiselle* という雑誌に載せられており、“Clock Without Hands” (Mlle, Jan., 1953), “Haunted Boy” (Mlle, Nov., 1955), “Who Has Seen the Wind?” (Mlle, Sept., 1956), “Stone Is Not Stone.” (Mlle, Jan., 1957) 詩などがあります。また最近作の劇 *The Square Root of Wonderful* が一九五七年十月に New York の国立劇場で上演されていますが、一般に評判は香しくなく、『結婚の一員』に比べると、第二の劇は凡庸に思われる」“After *The Member of the Wedding* Carson McCullers’ second play seems commonplace.” (*Times*) とか、「苦痛と唐突な忍び笑いの奇妙な組み合わせ」“An odd combination of pain and sudden giggles.” (*Herald Tribune*) というような不評も蒙っています。しかし、私は McCullers がここ数年にわたつて執筆中であり、今までにまだその一部しか発表されていない「針なき時計」という小説の完成を期待しております。この作品について、彼女は「死を前にひかえた人間の道徳的苦悩は、人間のもつとも深い素質を明らかにする、というのが私の主題です。小説の進むにつれて（主人公は）自分の肉体の病患よりもはるかに重大な魂とのたたかいにむかうのです。（これは）善と悪、そして人生のけだかさの肯定を扱った作品です」² とのべていますが、私どもが、McCullers 自身が不治の病いに冒されていることを知るとき、人生の最後の解答をうるために、このテーマと取り組んでいる作者

¹ Richie, Donald, 「カースン・マッカラーズ」、現代アメリカ文学主潮（加島祥造訳）東京、英宝社、一〇三頁。

² Richie, D, 前掲、一〇五頁。

の姿に接する思いがし、彼女が肉体の病患をとおしてどのような魂の快癒に向いうるであろうか、また彼女の中心問題であつた魂の孤独を超克して、どのような人生との和解に到達しうるであろうか、ということをふかい関心をもつて見守りたい気持であります。

以上は McCullers の作家としての経歴と、その作品の概観であります。彼女が五十年代のアメリカ作家群の中でも異色ある芸術家として占めている地位については疑う余地はありません。彼女は多産な作家とはいえ、その作品は八百頁たらずの一巻の書におさまってしまうほどの量であります。また、彼女の文学世界はせまい個人的なものであり、その素材の大部分は彼女が幼少時をすごした南部の環境から得たものであります。即ち奥南部の小都会とか、工場町とか、又は小市民的な家庭などという、だれにも親しみ易い日常的な生活環境であり、また彼女の描く tomboy 的な娘、子供たち、労働者、黒人家族などすべて南部社会の生きた庶民であります。しかし、そのように限られた個人的世界であるにも拘らず、その内的視野は意外にも広大であり、そこに継起する事件や、人物も多様で変化に富んでおります。そして、彼らは南部社会の人々であるのみか、アメリカ人そのものでもあり、また彼らの感情も悩みも私たち自身のものでもあります。McCullers はそれらの事件や人々や、またその内面の世界を精細なリアリズムを用いて作品のなかに創造し、あたかも作品をぬけ出して尚生きつづけるていの現実性をあたえております。しかし、それと同時にこれらの日常的な背景や、ありふれた人物は独特な色調と意味をおびていて、McCullers ならではの創り出しえない世界となつております。そして、彼女の文学世界にこの個性的な陰影をあたえているのは、もつて生れた強烈な病的なまでの詩的感受性であり、また彼女の特異な知覚に色とニュアンスをあたえる、それ自体 生きているような魔術的な言語であります。彼女の言葉は翼のある妖精のようにはばたいて、読者の想像の鼻をつかまえて引き廻し、ありふれた日常の世界から、不思議に魅力のある詩的 vision の世界につれこんでしまうのです。この彼女の能力を *Times* は次

のように説明しています。

She has a vision of the loneliness of mankind. She approaches this loneliness from many aspects, but always with a poetic vision that takes it off the ground of everyday reality and transforms this common loneliness into something rich and strange.¹

このように McCullers は人物や事件をきわめて dramatic に写實的に画くことの出来る客観性と同時に、象徴やイメージをゆたかに用いて、これらに独特な意味と陰影をあたえる 詩的想像力をもそなえた作家であり、手法の上では写実主義 realism と象徴主義 symbolism とが結びつくこととなります。Edith Sitwell が “Carson McCullers has a great poet's eye and mind and senses, together with a great prose writer's sense of construction and character.” と評しているのは、よく彼女の作家としての特長を言い得て適切であります。

McCullers が寡作な作家であり、必ずしも大衆うけのする型の作家ではないにも拘らず、彼女の作品は十ヶ国以上の国語に翻訳されており、世界のいたる所で一部の読者層から愛し親しまれているのは McCullers の上述したような芸術性の高さの上に、人間が生きる限り負わねばならぬ孤独という負目を彼女自身の問題としてとり組んでいる誠実さ、そしてふかい洞察力と人間的共感をもつてこの問題に approach している態度によるものでありましょう。

II. 作品の主題と構成について

I. “閉された世界”

McCullers の作品のすべてをとおして一つの統一を与えているものは孤独という主題であり、これが彼女の特異な 感覚印象の表現に 助けられて、彼女の 文学世界の 主な特色をなしていることは 前に述べた 通りであります。

¹ Anonymous, “Human Isolation,” *The Times Literary Supplement*, July, 17, 1953, p. 460.

す。McCullers が孤独を扱う視角はむしろ現象的であり、感覚的であつて、孤独の本質の思想的哲学的な追求にあるのではありませんが、彼女がどのような角度から孤独という現象にライトをあて、どのように主題を展開してゆくか、またどのような方法でこの主題を明確にしようとしているかということを、この章では主要な四つの作品を中心として考えて見たいと思います。

最初の小説の「心は孤独な獵人」という題名は、よく彼女の主題の意味を現わしております。即ち、人間はだれでも自分だけの魂をもつていて、本質的な意味で他人と魂を共にすることの出来ない孤独な生き物であるにも拘らず、心はこの孤独にひとり住むことに堪えず、常に他者との交わりを求め、自己を反映させる対象を探して漂泊せずにおれぬものだということであります。この題名の意味が、McCullers の殆どすべての作品の主題を代表しているといつても差支えありません。しかしどの作品においても、作者の語ろうとしていることは、心を通わせようとする試みの徒勞であり、その挫折から深められる孤独であり、またその試みの過程において人間のおかす錯誤や失敗やおろかしさの悲哀ということであります。McCullers は、作品の構成や人物の創造を入念な計画性にもとづいて行い、また様々な技巧を用いて、この孤独という主題を徹底させようとしております。

先ず McCullers の四つの作品をとおして考えられることは、彼女が予め「閉された世界」を設定することによつて、孤独即ち外界との communication の困難さを表現することに成功していることであります。彼女は作品の背景には、一つの円のように入口のない従つて外部との交流のない環境をえらびます。そして作中の人物は、彼らの住む環境から疎外されている人々、環境に順応しえないで、その中で孤立している人々であり、いずれも孤立状態から脱出し得ないために挫折感や失意を抱く人々であります。作者が特に世の中でも最も極端な疎外者である不具畸形の者、白痴や精神的変質者などを選んでいるのは「閉された世界」を強調する意図に外ならず、主題を徹底させるためのすぐれた選択といわねばなりません。

「心は孤独な獵人」において、McCullers は John Singer という啞を

1 中心人物として、彼の唯一の友としてこれも啞のギリシャ人 Antonapoulos を配していますが、この男は食べることにしか興味のない精神薄弱者であります。McCullers が「それ迄啞というものに接したことがなかった」¹ と語っているように、彼らは全然 fictional な人物であり、特に啞を中心人物に選んだことには作者の明らかな作為があります。二人は外にだれ一人友もなく、外界から切り離された終りのない沈黙の世界に住んでおり、二人の間の唯一の communication の手段は指のサインだけであります。しかも、一方の Antonapoulos の内部の世界は、薄暗い、荒廃した空白の世界であり、Singer の指のサインはこの空白に向つて一方的に働きかけられるにすぎません。この Singer の両手はその他のときは常にポケットに深くかくされていて、外部の人々に向つて用いられることはありません。この二人の人物のすむ隔絶された沈黙の世界には、救いのないおそろしい孤独が暗示されております。Singer の住む町で一軒だけ深夜営業をする Biff Brannon のカフェーは、夜ねつかれぬ孤独な人々のためにひらかれているものの如くであります。この店の中央のテーブルにいつも両手をポケットにさし入れて黙念と坐り続けている Singer は、作品の主題の「孤独」そのものであります。

下宿屋の娘 Mick は子供から大人に移り変る時期にあつて、大人たちからも年下の子供たちからも理解されぬ自分を持て余している少女であります。彼女は「外の部屋」outside room と「内の部屋」inside room という二つの世界を持つており、彼女は時々「外の部屋」に厭気がさすと「内の部屋」へ鍵をかけて閉ぢこもります。そこは彼女の未来の夢や計画が無限に発展する可能性の場所であり、又ここには、彼女の愛するものや、彼女の作曲した歌や、感動した交響楽や、まだ見ぬ外国なども入つていて、いわば愛や創造——自己表現の自由な場所であります。「外の部屋」は現実の世界であり、彼女にとつては、町の隅々まで知りつくした、何ら発展の可能性のない場所であり、ここでは彼女は始終、何物かを探し求めて焦

¹ Kunitz & Haycraft (eds.), "Carson McCullers," *Twentieth Century Authors*, New York, The H. W. Wilson Co., 1950, p.869.

燥を感じています。

Jake Blount は粗暴なくせに、繊細な魂をもった変り者の男で、知己も身寄りもない旅鳥の身であります。そのさびしさを酒で紛らしていますが、ある日 Brannon のカフェーで Singer を見かけて心をひかれ、「お前さんには分るんだ。おれの いおうとすることが分るのは お前さんだけだ。」と独り決めをして、Singer の許に通つては、心のたけを打ち明けるようになります。

Copeland 医師は、黒人ながら教養もある理想主義者であります、ニグロ人種の向上を願うあまり、常軌を逸した強制的な家庭教育をするため、妻子には理解されず、背かれて後は彼自身も胸を病みながら、黒人の患者を相手に孤独な生活を送っています。

Biff Brannon は身体不具者や変り者に同情を持つ人であり、それというのも彼自身がある事情から性的不能となり、すでに「人生の一切が終つてしまつた」ような失意を抱く人だからであります。彼の妻とは、夜と昼とにベッドを交換して寝るほどの情の通わぬ間柄ですが。ある日妻は急死して彼はやもめの身となります。彼は男の子のような Mick に淡い恋情を抱いていますが、Mick はそれには無関心で、かえつて彼のそぶりに警戒心を抱いております。これらの人々は、それぞれの意味で自分の中に閉ぢこめられており、周囲の世界との交わりを欠いている人々であります。彼らは期せずして啞の Singer を中心として集まり、彼が口がきけないためにかえつて、自分がこうあつて欲しいと願うような人物に見立てて、彼こそ自分らの孤独の体現者であるように思いこみ、彼に愛情をささげるようになります。それでは、当の Singer はどうかというのに、四人の人たちにとつて彼が不可解な存在であつたように、彼の方でも四人の人たちの真意を理解することは出来ず、屢々当惑しております。そして彼自身は Antonapoulos のみを熱愛して、彼が精神病院へ送られると、孤独と寂寥にたえかねて町を彷徨するようになります。そして、この友人が病死するや、自分の存在理由を失つて自殺してしまうのであります。他の四人からは救い主のように見なされた Singer も、愛する対象なしに生きられない

最も弱い人間の一人にすぎないことが判然するのであります。

McCullers はこの作品の意図について “The theme is the plot; the hungry search of these people for an escape from individual loneliness. . . . The book is a parable in modern form, and the fundamental idea is ironic.”¹ と言っておりますが、彼女は孤独を脱出して、自己表現の道を求めようとする人々のあがきを描くのにあたつて、幾重かの皮肉を作品の中におり込んでおります。

第一この作品の構成 そのものに皮肉な 意図が明らかであります。即ち、中心人物に啞の Singer をえらび、その親友に薄馬鹿の Antonapoulos を配したこと、そして Singer を中心とする円周上に Mick やその他の人物を配置したことは作者の周到な計画性によるものであります。これによつて作中の人々が communication を成就させることの不可能な状況が最初から設定されているからであります。Singer はめつたに自己表現をせず、つねに他人の解釈にまかせられている存在であり、McCullers は彼に現実的な個性以上の「寓意」をあたえております。即ち啞つんぼは、外界との communication をもつ術がない故に、人間の「孤独」の symbol であります。Antonapoulos も同様「閉された世界」であり、意識せざる「孤独」であります。そして Singer の周りに「車輪の箭が中心に向うように」集まつた四人の人たちの間にはそれぞれ白々しい壁があつて、意志の疎通を欠いているのであります。彼らが孤独から逃れようとする余り、彼らの理解に苦しんでいる啞を唯一の理解者として偶像視し、愛情をささげるということは、事實は illusion に過ぎない所に作者の皮肉があります。作者は懐疑的な Biff に次のように言わせています。

The thing that mattered was the way Blount and Mick made of him a sort of home-made God. Owing to the fact he was a mute, they were able to give him all the qualities they wanted him to have. Yes. But how could such a strange thing come about? And why?²

¹ Richie, Donald, 前掲、一〇六頁。

² McCullers, Carson, “The Heart Is a Lonely Hunter,” *The Ballad of the Sad Café*, Boston, Houghton Mifflin Co., 1951, pp. 371-372.

また、啞の自殺にも二重の皮肉があります。それは Singer を救いの神のように見立てていた人々の思いちがいに対する皮肉であり、また Antonapoulos の死にあうと Singer 自身は自分を救い得ないで、取り乱して死んでしまう矛盾への皮肉であります。McCullers はこのように、illusion や思いちがいで成り立っている人々の関係を Singer が一夜見た夢の物語のなかで巧みに暗示しております。この夢には多くの宗教的 image が用いられていて、無気味で肉感的な異教の礼拝を連想させます。Singer は階段の中程に、裸でぬかづいており、一番上段には、これも裸の Antonapoulos が頭上にさしあげた物を弄りながら、祈りをするようにそれを見詰めています。Singer の後ろには Mick ら四人が裸で跪い彼を仰いでいます。この夢の中で McCullers は、Antonapoulos を頂点とする偶像崇拜の図を描いているのではないのでしょうか？ 作者が Singer という名前からも風貌からも啞にユダヤ的特長を与え、Antonapoulos をギリシャ人としたことも、意識的な技巧があると思えます。Antonapoulos が自己中心で肉欲的な男であるのとは対照的に、Singer は瞑想的、神秘的で、いわばキリストの image であります。そして四人は Singer を救い主のように礼拝し、Singer は異教徒たる Antonapoulos を偶像として礼拝している図は、どこかに間ちがいのある奇妙な光景であります。その中に地震がおこつて、この礼拝殿はがらがら崩れてしまいます。この象徴的な夢の構図が、この作品の構想そのものを暗示しており、且つその意図が諷刺にあることは明らかであります。そして、このことは McCullers が、“...the fundamental idea is ironic. Indeed it is a story of Fascism, but it must be understood that the word is used here in its very broadest terms and that it deals with the spiritual rather than the political side of that phenomenon.”¹ と述べている言葉とも符合するものであります。結局、作者の意図は、人々が孤立することを恐れる余りに、illusion——偶像をつくりあげて、その下に寄り集まろうとする Fascism

¹ “Carson McCullers,” *Current Biography*, 1940, p. 535.

的な傾向を諷刺する物語を書くことにあつたのでありましょう。

以上のように、McCullers は、孤独という主題を表現するために、屢々象徴的な手法を用い、ある時は背景そのもののの中に、ある時は作中人物にこれを象徴することに巧妙であります。啞の Singer や、薄馬鹿の Antonapoulos は人物そのものが「閉された世界」であり、Mick にとっては「閉された世界」は「外の部屋」であり、彼女の息ぬきの出来る場所は「内の部屋」、即ち空想の世界しかないのです。Biff の「閉された世界」は性的不能によつて暗示され、黒人 Copeland にとっては、白人の社会から疎外された黒人社会そのものが、一つの「閉された世界」に外なりません。

第二作「金色の目の映像」においては、背景、人物ともに、この入口のない世界を表しております。背景は平時における陸軍駐屯地という束縛された、しかも動きのない限定的な環境であります。主要人物の Penderton 大尉は性的不能者であり、William 一等兵は馬のほかに、一人の友もない孤独な変質者であります。このように「閉された世界」のなかで、人間の本能や情緒が抑圧されるとき、それは歪められた姿で、しかも残忍な烈しさを伴つて発現するきつかけを待っているものであり、時には自己をも他人をも破壊する作用をするものであります。作者は、前作よりさらに限定された、ぬきさしならぬ状況に追いつめられた人間の孤立と、その成り行きとをこの作品の狙いとしているように思われます。

Penderton 大尉の「閉された世界」は、Biff の場合と同様、性的不能によつて暗示されております。彼は「自分の中に男性と女性の両要素が微妙なバランスを保つていて、両性の感情をもちながら、しかもどちらの能動的な力も持たない」男であり、妻との間には体の交わりを持ちえない夫であります。この挫折感や焦燥は、大尉の場合はたえず何物かへの憎しみの形となつてはけ出さずにはおれないのであります。しかも、夫の無能力を軽蔑して、絶えず浮気沙汰を起している妻に対しては、その不貞を承知しながら何事もなし得ず、かえつて妻の情人に愛着を感じてしまうといった masochistic な傾向をももつた人物であります。彼が妻の情事を曝露しえないのは、そのためにかえつて妻に去られて、孤独の身となることを恐れ

るからであります。この臆病な孤独な男のなかに鬱積している情緒は、たまたまパーティで新しい軍服にコーヒーをこぼされたというだけの理由で、William 一等兵への怨恨となつてはけ出されることになります。William は無智で衝動的な、野の獣のように孤独で、健かな肉体をもつた若者であります。彼はふとしたことから大尉夫人の裸体をのぞき見して以来、魂を奪われ、遂に彼女の寝室に忍び入つて寝姿を恍惚として見入るようになります。彼の金色の眼にやきついた映像は、彼の空白な「閉された世界」をみたしてしまうのであります。一方 Penderton の憎しみは一日遠乗りに出かけて森の中で全裸をさらした William に出会して以来、奇妙な恋情と絡み合うようになります。大尉の理由もない憎悪の根底には、性的不能者の抑圧された本能の悲しみや、劣等感や屈辱感が潜んでいます。この憎しみは、兵卒の健やかな肉体への羨望によつて拍車をかけられ、一方両性の要素をもつた大尉の中には同性の肉体の魅力に対する倒錯した愛情が生じたと見る事が出来ます。

The Captain was overcome by a feeling that both repelled and fascinated him . . . it was as though he and the young soldier were wrestling together naked, body to body, in a fight to death.¹

大尉の執着は毒を含んだ腫物のように日にまして大きくなり、これを切開しなければ彼自身の命とりになる恐れがあります。彼はこの病的な obsession をのがれるために、自分に無関心な兵卒との間の障壁を破つて是非とも彼に反応を示させたいという欲求を感じ始めます。この願望は抗がたい強制力にうながされて暴力への意志となり、彼と兵卒との関係を急速に破局へと運んでゆき、一夜大尉は妻の寝室に忍びこんだ William を射殺してしまいます。

この殺人行為の動機は何処にあるのでしょうか？それは愛とか憎しみとか嫉妬とか呼ぶことの出来る単一な感情ではなく、さらに深い所にある何か、即ち閉された自我のなかでふくれ上り、発酵し、自壊作用を行い

¹ McCullers, "Reflections in a Golden Eye," *op. cit.*, p. 556.

はじめた本能的な衝動にあるのではないのでしょうか？ 自己を閉ぢこめる壁を破つて、対象と自分との間に communication の通路をひらき、対象の中に自己を実現させたいという願望、このままでは自己を滅すかも知れないまでになつた願望の行わせたさけがたい破壊行為ではないのでしょうか？ Freud 流の解釈をすればそれは libido の力というべきものでありましょう。McCullers は「閉された世界」の中で自分自身に追いつめられた人間の communication の切な要求を、このような固執観念の形で異常な situation のもとに描き出しており、この要求を人間の本能的衝動と直接結びつけて不可抗的な強制力として現わしております。それ故、最後に兵卒を射ち殺すピストルの音は、見えぬ obsession の壁を打ち砕くもののよう、善悪の規準をこえた一種の解放感さえ伴っております。Louis Untermeyer が “The story proceeds from some inner compulsion which is as unplanned and as inevitable as life itself”¹ と評しておりますが、McCullers はこの作品で入口のない、抑圧され、歪められた人間の内部の reality をおどろくべき克明さで分析し、これに必然性をあたえているからであります。

第三作「結婚の一員」では、人間の孤立、communication の要求、そして illusion による挫折という同じ主題が、より日常的な、より私どもに身近な人物に托して語られております。この作における「閉された世界」はこの物語りの背景となる Frankie の家の台所、及びこの世のどんなクラブにも所属出来ないで「ひとりで扉口の辺をぶらぶらしている」より仕方のない少女 Frankie によつて表わされます。この物語は非常に面白い構成をもつています。全体は三部に分たれ、各部が Frankie が子供から大人に移り変る内面的な変化の段階を表わしており、この変化は特に Frankie の名前の変化によつて象徴されています。第一部で「閉された世界」をもつた Frankie が、第二部で Jasmine と変るとき、これは世の中から孤立した自分でなくなることを極力望んでいる Frankie が、兄の

¹ Warfel, Harry R., *American Novelists of Today*, New York, American Book Co., 1951, p. 292.

Jarvis, 花嫁の Janice という名前に合せて Jasmine となり、自分も結婚式のメンバーとなつて閉された自己を脱出することを意味しています。第三部では Jasmine はも早子供の Frankie にはかえらず、本名の Frances に変わります。これは自己発見の危機を通過し、communication の幻想に破れた、大人になつた Frances を意味するのであります。このような構成上の技巧は、Sitwell や T. Williams のみとめるような並々ならぬ独創的な能力といわねばなりません。

第一部において、Frankie は自分の存在について、自分と世界との関係について疑惑をもち始め、自分が外界から全く孤立した存在であることを発見して恐怖におそわれます。

This was the summer when for a long time she had not been a member. She belonged to no club and was a member of nothing in the world. Frankie had become an unjoined person who hung around in doorways, and she was afraid.¹

... She was afraid of these things that made her suddenly wonder who she was, and what she was going to be in the world, and why she was standing at that minute, seeing a light, or listening, or staring up into the sky: alone.²

彼女が世間のどんなクラブにも属さず、だれとも communication をもたぬという孤立の自覚からくる恐怖は、今一つの「数学的にわり出せる」恐怖と結びついています。それは、ぐんぐん成長する自分の肉体に対する恐怖であります。一年に四吋も伸びる今の調子でゆくと、十八才には九呎以上の大女になつてしまいます。そうなれば彼女は畸形児 freak であります。彼女はかつて見世物興行の「畸人の家」で見た一寸法師や、半男半女や三角頭など、おぞましい姿をしたかたわ者たちの眼が彼女の視線をとらえ、「おれたちはお前を知っているのだぞ」と語りかけるのを感じて恐怖におそわれます。そして自分もあの世間から閉め出されたかたわ者の同類なのだという潜在意識が彼女の孤独感を一そう鋭いものにします。

彼女が孤立した自己を脱出して、世の中の一員になりたいという願望の底には、次のような考えがあります。

¹ McCullers, "The Member of The Wedding," *op. cit.*, p. 599.

² *Ibid.*, p. 624.

Yesterday, and all the twelve years of her life, she had only been Frankie. She was an *I* person who had to walk around and do things by herself. All other people had a *we* to claim, all other except her. When Berenice said *we*, she meant Honey and Big Mama, her lodge, or her church. The *we* of her father was the store. All members of clubs have a *we* to belong to and talk about. The soldiers in the army can say *we*, and even the criminals on chain-gangs. But the old Frankie had had no *we* to claim, unless it would be the terrible summer *we* of her and John Henry and Berenice—and that was the last *we* in the world she wanted.¹

即ち Frankie の願いは「閉された世界」から歩み出て、人格的な「共同体」の一員になりたいという願いであります。これは誰しもが持つている自己実現への要求であります。人間が自分を人格 person として認識し、この人格を実現させようと欲しても「閉された世界」——孤独の中にとどまるかぎり不可能であります。人間は誰でもこの孤立状態から脱け出して、他の人のなかに自分を反映させ、他の人によつて自分の実存を確かめたいと願うものなのです。Frankie の「本当の自分を知つて認めてもらいたいという要求」“the need to be known for her true self and recognized.”² はそれを意味しております。この要求は Frankie の中では、目下進行中の第二次大戦に参戦して功勲を立てることとか、赤十字に自分の血を提供して、世界の兵隊の体内に自分の血が混つたら、さぞかし彼らと近しい血縁のように感じるだろうというような空想となつて現われるのです。

このような心境にある Frankie には、兄の結婚式、若い二人の男女の結びつきがすばらしい魅力となつて心に映り、兄と花嫁こそ私の *we* でなくてはならない。“They are the *we* of me.”³ そして、この孤立から脱出する最上の手段は結婚式によつて三人が共通する *we* をもち、一緒に世の中へ出て行くことなのだと決めこんでしまうのであります。

第二部では、Frankie が結婚式のメンバーになると決心した時から、彼女の世界には魔術のような変化がおこります。そして、この内的な変化に応ずるかのように Frankie の名前は Jasmine と変ります。彼女は最早孤

¹ *Ibid.*, p. 646.

² *Ibid.*, p. 670.

³ *Ibid.*, p. 646.

独をおそれなくなります。「閉された世界」はひらかれ、今まで無縁であつた世の中は彼女を受け入れ、彼女は見る物きく物すべてに新しい connection の感じを抱くようになります。そしてあれ程嫌つていた世の中が彼女を感動させる甘美なものに充ち始めるのです。しかし、これらの経験はすべて、早晩、挫折しなければならぬ illusion の中で行われていることを、Frankie は依然として透明なガラス張りの世界の内から空しく外界に向つて呼びかけている存在にすぎないことを、作者は様々な暗示的手法を用いて表現しております。第二部の前半で、Jasmine が結婚式用のドレスを買いにいそいそ町に出かけて、会う人毎に結婚式の計画を話しかける場面はすべて Jasmine のモノローグで終始していて、話の相手は夢の中に出てくる人々のように一言も口をききません。また彼女が駆けながら道路工事のトラクター人夫に、両手でメガフォンを 作つて大声で話しかけ、人夫も何やら叫び返しますが、その声はトラクターの騒音に消されてお互いの耳には届かないのです。これらはいずれも communication への意志の挫折を暗示する情景に外なりません。結婚式の当日、Jasmine は父親や Berenice と共に参列しますが、新郎新婦が蜜月旅行に出発するまでの時間は、彼女の力の及ばぬ悪夢のように過ぎてしまいます。彼女はその夜一人で町を脱出しようとしませんが、何処へ行くべきかも皆目分らず、ポリスに家へ連れ戻されてしまいます。

第三部において、あの狂おしい夏 crazy summer の経験をへた Jasmine は本名の Frances に変わります。青春の傷を癒す力のおかげで、Frances はもう焦燥もしなくなりました。この最後の章を作者は Frances が愛する友達を得て、今に世界旅行に出かけようという新たな希望をもつ所で終らせております。けれど、月並みな大人に転身した Frances には、あの狂おしい八月の日に、Frankie がうずくような孤独感と無力感のなかからつくり出した They are the *we* of me. の美しい fantasy はふたたび訪れることはないでしょう。

2. “愛することの孤独”

以上の作品で知られるように、孤独を逃れようとする人々が求めるものは、心の communication であり、この要求は結局愛の対象を探し求める姿として現われております。しかもその愛は大方は illusion として挫折させられるか、又は報われぬ愛で終つております。人間に愛する能力がありながら、その愛が一方交通で終つて、愛するが故に尚切に孤独を味わわねばならないという皮肉な真実を最も明瞭に描いているのが、伝説譚「悲しきカフェの譚歌」でありましょう。この作品は形式手法の上では最も完璧な作品であり、「孤独」の主題は、背景、人物、筋の中に見事に象徴されております。物語の背景となるのは、他の町々から遠く切り離されたわびしい町であり、またその中央に位する板がこいで遮蔽された荒廃した一軒の家であります。登場人物は、男とも女ともつかぬすがめの大女、肺病やみのせむし、犯罪者といつた、いずれも社会から閉め出されるにちがいない尋常ならぬ人たちであります。これらの背景と人物はいずれも、「閉された世界」を象徴しております。このさびれた家の唯一つの窓から時々外をのぞく顔があります。

It is a face like the terrible dim faces known in dreams . . . sexless and white, with two gray crossed eyes which are turned inward so sharply that they seem to be exchanging with each other one long and secret gaze of grief.¹

この幽霊のような悲しい顔の持主が主人公 Amelia 嬢のなれの果てであります。この板がこいで閉された家は、愛を失つて孤独となつた Amelia 嬢の心の世界と照応しております。しかし、この家もかつてせむしへの愛のため Amelia 嬢の心の門戸が開かれていた間は、人々の寄り集う陽気な社交場となりますが、彼女が愛に挫折すると同時に再び閉されて荒れはててしまうのです。カフェーの開店と閉鎖とは、Amelia 嬢の心のなかの愛の芽生えと消滅とを暗示しております。

Amelia 嬢はかつて金持の食料品屋で、男の愛を受けつけようともせぬ

¹ McCullers, “The Ballad of the Sad Café”, *op. cit.*, p. 3.

強欲な女でありましたが、町でも名代の無頼の徒 Marvin Macy が彼女に恋慕して、人が変つたように悪業を慎しむようになります。二年後に Amelia 嬢はその求愛を入れて結婚した所が、夫婦のちぎりも結ばせようとせず七日目に Marvin を追い出します。Marvin は又悪党に逆もどりして、近隣に悪名をとどろかせ遂に刑務所に入れられてしまいます。それから六年後に、Amelia 嬢は、この町に現われたいとこと自称するせむしの旅人を家に入れて、彼に愛を注ぐようになります。彼女はせむしの機嫌をとるため店をカフェに改造して愛想よく客をもてなすようになり、せむしの社交術のおかげでカフェは町で唯一の交歓の場所となります。かくて九年がたち、Marvin が出獄して町に帰つてくると、せむしは一目で彼の悪党ぶりに魅了されてしまい、あとを追ひ廻し、遂には Amelia 嬢の家に引き入れます。せむしへの愛のために気も弱くなつた Amelia 嬢は、内心切齒扼腕して機会をうかがつていますが、ついに宿怨を晴らす時が来て、二人は力業の決闘をすることになります。そして Amelia 嬢の力がまさつて Marvin の負けと見えた瞬間、せむしは後から彼女の首を締めあげて、勝敗を決してしまいます。その夜二人は嬢の財産をうばつて逐電し、嬢はその後三年間、毎夜戸口でせむしの帰りを待ちますが、せむしはそれきり帰らず、カフェはさびれ、嬢は傷心の身を家の奥へ閉ぢこもつてしまうのであります。

この一見喜劇的なお伽噺のなかには、今まで通観してきたどの作品にも共通する心を通わせる試みの空しさ、愛の一方交通の姿が最も象徴的な形で現われていることに気がつくでしょう。Marvin の Amelia 嬢に対する恋慕は実を結ぶどころか家を追い出される破目となり、嬢のせむしに対する愛はクライマックスで裏切られ、せむしの Marvin に対する愛着は利用されるだけで、いずれも残酷な手段で挫折させられております。McCullers の描く愛は例外なく一方的であつて、相愛する姿が一つとして現われぬことが著しい特色であります。Singer は彼を慕う Mick や Blount によつては孤独を医されず、Antonapoulos のみを愛しますが Antonapoulos が熱中するのは食物ばかりであります。Penderton 大尉は William に執着し、

William は大尉の妻の何の反応もない寝姿にモノマニア的な憧憬をささげております。Frankie は孤独をおそれるあまり結婚式を愛してしまいます。人々を一ときでも孤独から救うものは愛であり、また少なくとも Frankie の求めるような共同体の意識であります。が、かたわ者や犯罪者のように最も孤立した、それ故最も愛を必要とする人々の間でさえ愛は成立しないで、その結果人々を不幸にしたり、さらに深い孤独に追いやつております。

McCullers の作品には愛を欠いているために、さびしい思いをしている人々にみちていますが、そのさびしさは時には自分の中に愛を欠いているエゴイストのもつさびしさでもあります。Frankie は真に人を愛したこともなく、愛を信じずあざ笑っていた少女であり、Mick や Penderton 大尉や William 一等兵もそうであります。これは、愛なきものの孤独感であります。また愛するものの心にわくさびしさというものがあり、Amelia 嬢の目はいつも憧れと悲しさをこめてせむしを眺めております。

She watched all that went on, but most of the time her eyes were fastened lonesomely on the hunchback. . . . She seemed to be looking inward. There was in her expression pain, perplexity, and uncertain joy. . . . Her look that night, then, was the lonesome look of the lover.¹

McCullers は人間の心の真に結ばれ合うことは困難であるという前提のもとに、時には愛によつてさえ医されがたい孤独の深さを表現しようとします。人は愛によつて、また時には Penderton 大尉のように憎しみによつてさえ他者との交わりを持ち、孤独から脱出しようとするものですが、愛の自覚がふかまるにつれて、かえつて心と心の間隙が痛切に意識されるようになり、愛するが故のあらたな孤独感を味わわねばならぬということも一つの皮肉な真実であります。McCullers はこの作品の中で、愛に対する見解を次のように述べております。

First of all, love is a joint experience between two persons . . . but the fact that it is a joint experience does not mean that it is a similar experience to

¹ McCullers, *op. cit.*, p. 21.

the two people involved. There are the lover and the beloved, but these two come from different countries. Often the beloved is only a stimulus for all the stored-up love which has lain quiet within the lover for a long time hitherto. And somehow every lover knows this. He feels in his soul that his love is a solitary thing. He comes to know a new, strange loneliness and it is this knowledge which makes him suffer. So there is only one thing for the lover to do. He must house his love within himself as best he can; he must create for himself a whole new inward world—a world intense and strange, complete in himself. . . the value and quality of any love is determined solely by the lover himself.

It is for this reason that most of us would rather love than be loved. Almost everyone wants to be the lover. And the curt truth is that in a deep secret way, the state of being beloved is intolerable to many. The beloved fears and hates the lover, and with the best of reasons. For the lover is forever trying to strip bare his beloved. The lover craves any possible relation with the beloved, even if this experience can cause him only pain.¹

この見解は、何故 McCullers が愛の一方交通の現象をしか描かないのだろうという疑問に対する解答を提供しております。この見解によれば、ことなつた二人の人間の間に愛が生じた場合、共通の経験であるといいながら、愛するものと愛されるものとの間には、愛の体験の深さや強度には unballance があり、愛されるものは必ずしも愛するものの要求を充すことが出来ず、その面では愛されるものは愛するものに背を向けて追われるポーズをとり、愛するものは之を追いかねばならぬ、この不均衡が両者に異つた性質の苦痛をあたえる結果となります。即ち愛されるものは愛の過重を苦痛としてうけとり、愛するものは充たされぬ愛の空隙を寂寥感として受けとらねばなりません。「愛される状態は、多くの人にとつてたえがたいもので、愛されるものは愛するものをおそれ嫌悪する。しかもそれにはもつとも至極な理由があるのだ」という言葉は、愛の相互的な交流に対しては残酷なまでに否定的な見方であり、また「愛されるものは、愛するものの中に蓄積されていた愛を刺戟する役をするにすぎない」という考えは愛の性質そのものを孤独なものとみなし、愛の一方交通性を認めることであります。McCullers の孤独観はそれほど徹底したものであり、彼女にとつて孤独を滅却した愛はあり得ず、「生きることが孤独である」よう

¹ McCullers, *op. cit.*, pp. 24-25.

に「愛すること自体も孤独である」ことを主張しているのであります。

しかし、この引用文のなかで McCullers は愛によつてより深い孤独に目ざめた人が、それにも拘らず尚孤独の寂寥から救われるべき一つの愛の境地を語っております。即ち「自分の中に出来るだけ愛を住ませ、自分で新しい全き内的世界——熱烈で、不思議な、彼自身の中で完成する一つの世界を創り出す」ことであります。魂の真の交流は不可能であるという前提の下では、愛さえも孤独の相を帯びざるを得ず、このような境地はも早愛の対象に期待や要求を持たない愛といえます。愛とは両者の間に交流する感情であり、両者の共感と協力とによつて成長し、成就するものだという愛の通念からすれば、このような見解には多くの疑問点があり、必ずしも私どもを納得させはしません。しかし、この見解は、愛の孤独性をみとめた上で、愛が相手に理解されず、償われぬものであつたにせよ、自分自身の内に愛を住ませ、愛自らの力で愛を育て上げることによつて魂の充足を得、墮獄の恐怖から救われることを意味しております。何故ならば愛の本質は元来能動的なものであり、それ自身成長する芽をもち、従つて愛する人自身を救済する内在的な力となり得るからであります。Mick や Blount や Copeland 医師は啞の無言のうなずきや、神秘的な微笑に愛の確証を得たかのように力づけられ、精神薄弱の Antonapoulos に対する Singer の愛は全く無償の愛でありながら、その愛は別れたのちも年と共に成長し変化して彼を孤独から救つております。

Behind each waking moment there had always been his friend. And this submerged communion with Antonapoulos had grown and changed as though they were together in the flesh. . . . When he dreamed at night the face of his friend was always before him, massive and wise and gentle. And in his waking thoughts they were eternally united.¹

また Frankie の結婚式に対する愛も illusion にすぎないとはいえ、彼女の周囲の世界をさえ変えてしまい、彼女は孤独を恐れなくなります。

このような内在的な愛の思想は、短篇「樹・岩・雲」 *A Tree. A Rock*

¹ McCullers, "The Heart Is a Lonely Hunter", *op. cit.*, p. 461. Also see pp. 340-341.

A Cloud においては一そう徹底した形で語られています。深夜営業のレストランのある夜明け、一人の老人が新聞配達の少年を呼び止めて、彼の長い愛の遍歴について語り始めます。この男はかつて二人の女と結婚しますが、二度とも女に捨てられてしまい、その後は旅から旅へと愛を探しての放浪をつづけ、最後に不思議な「平安」の境地にたどりつきます。

And it is this. And listen carefully. I meditated on love and reasoned it out. I realized what is wrong with us. Men fall in love for the first time. And what do they fall in love with? . . . A woman. Without science, with nothing to go by, they undertake the most dangerous and sacred experience in God's earth. They fall in love with a woman. . . . They start at the wrong end of love. They begin at the climax. Can you wonder it is so miserable? Do you know how men should love? . . . A tree. A rock. A cloud. . . . I meditated and I started very cautious. I would pick up something from the street and take it home with me. I bought a goldfish and I concentrated on the goldfish and I loved it. I graduated from one thing to another. Day by day I was getting this technique. . . . And now I am a master. Son. I can love anything. No longer do I have to think about it even. I see a street full of people and a beautiful light comes in me. I watch a bird in the sky. Or I meet a traveler on the road. Everything, Son. And anybody. All stranger and all loved! Do you realize what a science like mine can mean?¹

この老人の語る愛の science は、愛に挫折し、魂の相交わることの至難さを知った人が長い歳月にわたる孤独への沈潜のなかから見出した愛の理論であり、この境地は、先の引用文の中の「自分で創り出すべき新しい全き内的世界——熱烈で不思議な、彼自身のなかで完結する世界」であります。それは特定な愛の対象に限られることなく、自然や人間以外のすべてのものをも包含し、彼らの生命に自分の生命を通わせる自由無碍な境地であります。自然や動物に対しては愛を強要することは出来ない代りに、それらにはいつわりも奸計も裏切りもなく、従つて愛による闘争もなく、愛を失う絶望もありません。それは宇宙のように無限大であると同時に無にひとしい愛であります。この老人の最後に到達したという「平安。奇妙にも美しい無」“Peace. A queer and beautiful blankness.”² はこの境地を意味しております。そして男は、愛はそこからはじめて最後に女に至るべ

¹ McCullers, “A Tree. A Rock. A Cloud,” *op. cit.*, pp. 137-138.

² McCullers, *Ibid.*, p. 137.

きだと説くのであります。これは McCullers の愛の思想の帰結ともいえるものであり、孤独へのふかい認識をとおして得られた諦観、あるいは悟道ともいうべき境地でありましょう。しかし、この境地は McCullers においては未だ観念の域を脱せぬもののように思われ、作者の信念として人物の中に肉体化されるには至っておりません。即ち、作者はこの老人をして観念を説かしめているに過ぎず、この愛の理論に従つてまだ人間を愛する「最も危険にして神聖な」最後の段階に踏みこむ決断をさせてもいないのです。そしてまた McCullers の他の作品中の人々も、このような孤独の最終的な救済法ともいうべき愛の理論によつて救われているとは思われません。作品全体を通観するとき、人間は依然として孤独であり、心の交流をはばむ壁から脱出しがたいものだという否定的な結論の印象をあたえられることは否めません。「樹・岩・雲」の物語もその点では例外ではなく、老人の「お前を愛しているよ」とくりかえす言葉は裏返してみれば、この愛の観念性を cover しようとする試みにすぎず、従つてこの言葉は不自然さを感じさせ、空疎な響きをしか与えません。そして、呼びかけられた少年にしても、最後まで話の意味を理解することは出来なかつたのでありますから。

3. “慈悲の愛”

McCullers は、人間の孤独という問題にはこのように否定的な諦観をさえ感じさせる態度で立ち向い、相互的な愛の交流をさえみとめようとしないうのです。それでいて、彼女の作品がやり切れない絶望感や救いのなさを感じさせないのは何故でしょうか？ McCullers の作品には、暗い否定的な要素と、陽性で肯定的な要素が併存しております。彼女の感受性のレンズは多様な屈折度をもつて外界の印象をうけ入れ、時には病的な歪んだ映像をつくり、時には極めて健やかな自然な姿を再現します。私は今まで McCullers の暗い面のみを採り上げて来ましたが、またそれが彼女の作品の主調となるものでもあります、同時に素直で楽天的な要素がこれに変化を与えていることも見遁してはならぬ点でありましょう。この懷疑或不

信のない楽天性は、暗さと同時に McCullers の作品のアメリカ的特質と考えることも出来ます。

McCullers の作品における孤独の主題は、裏返せば愛の主題ともなり得るものです。それは人間が生活したり、闘ったり、悩んだりする過程に孤独という主題でメスを入れ、愛という主題でこの傷口に膏油を塗るようなものだともいえましょう。この世の孤独が愛と結びつくのは先ず自然な姿であり、McCullers においても、一ときにしろ孤独を癒しうるものは結局愛のほかにはないということが、自明の解答となつています。彼女は孤独という人間の条件から目を背けることは出来ず、その結果否定的な結論しか出て来なくとも、この孤独の antithesis としての愛そのものに関しては極めて肯定的であります。彼女は、孤独への内観力のふかさに劣らぬほど、人間に内在する愛についてもふかい認識の力をもっており、作品のなかで、人間が愛したり、愛によつて救われたり、また愛によつて挫折したりする姿を、さまざまな角度からえがいて、愛の本質に迫ろうとしています。しかし、McCullers が愛の存在やその力について、些かも懷疑や不信を抱かぬ点で彼女の楽天性を発揮しております。それ故、彼女のえがく愛は極めてナイーブで卒直な愛であり、対象が何であろうとも、報償がなかろうと、道理に合わぬものであろうと、異常な現われ方をしようとも、愛するものを純粹さで輝かせ、無条件で相手を包みこんでしまうような、ゆたかな人間愛であります。McCullers の作品の中の、多くの挫折した孤独な人々の間で一条の光明のように輝くのは、この単純無垢な愛、愛さずにおれない本然の愛であります。このような愛の具現者は、たとえば「心は孤独な獵人」の黒人 Portia であり、また「結婚の一員」の Berenice であります。Singer が Antonapoulos を失つて自殺し、Penderton 大尉が William 一等兵を殺したのも、それぞれ徹底した愛の成就であります。愛する女に捨てられた老人は、孤独の中から尚愛する術を会得し、その愛も cynicism に少しも損われてはおりません。このように作中の人々が愛そのものを否定したり、自ら愛を裏切ることがありません。ただこの愛が一方交通に終る所に人間の挫折感が生ずるのです。

Mick に向つて “But you haven’t never loved God nor even nair person. You hard and tough as cowhide. But just the same I knows you. . . . Your heart going to beat hard enough to kill you because you don’t love and don’t have peace. And then some day you going to bust loose and be ruined. Won’t nothing help you then.”¹ と説得する Portia はまた、妻子に背かれた父親の Copeland を訪ねて、まめやかに世話をし、投獄された弟のことを身も細るほど案じ憂う愛の人であります。焦燥のため気狂ひ染みた行為をする Frankie を扱う Berenice は経験智と忍耐にみち、慈愛そのものであります。Berenice の心にある愛の世界は円満で、正しく、理に叶つたものであり、その信念は太い力強い声となつて、いつも Frankie を承服させる力をもつています。彼女の理想は、人種に差別がなくなり、この世界の人々が愛し合う一家族となつてしまうこと、この世から戦争と飢餓が去つて、地が平和にみちることです。彼女はまた、自分を「女王様のように」幸せにした最初の夫 Ludie との愛を忘れかねて、夫の面影を別な男の夫のそれに似た親指、しかも夫の中で一番みにくい部分であつたつぶれた親指だの、又別な男の夫と爪二つの背中だのに見出して、いわば夫の断片を愛することによつて生きて行きます。

I loved Ludie and he was the first man I loved. Therefore, I had to go and copy myself forever afterward. What I did was to marry off little pieces of Ludie whenever I come across them. It was just my misfortune they all turned out to be the wrong pieces. My intention was to repeat me and Ludie.²

Berenice の三度の結婚の動機は、断絶させられた愛の生み出したおろかしい妄想にすぎません。が愛とは事実そのようなものであります。それは具象性に徹した愛であり、この Berenice のグロテスクな、またユーモラスな体験談は、理性をこえた所で読者の胸を打つものがあります。それは、作者を感動させる純粹で素朴な愛の vision が、この物語のなかに読者を感動させるに十分な fidelity をもつて再現されているからであります。

¹ McCullers, “The Heart Is a Lonely Hunter,” *op. cit.*, p. 192.

² McCullers, “The Member of the Wedding,” *op. cit.*, p. 725.

また、自分の感情を正しく伝え得ないもどかしさの余り、肉切りナイフをふり廻そうとする Frankie を Berenice がいきなり膝の上に引抱える場面があります。六才の John Henry は自分も膝にのせてもらいたく、“I am sick.” と訴えて Berenice の背中からしがみつきます。そのままの姿勢で、二人は、それぞれの意味で「閉された世界」の中にいる自分たちの息苦しさを語り合います。そうして、台所の薄暗のなかで、一とき黙って坐っているうちに、三人は突然、同時に泣き出します。三匹の動物の仔のように体を寄せ合い、おたがいの呼吸と血の温かさを感じながら。それぞれに孤独の寂しさを感じる人間が寄りそい、肉体をとおしてたがいの生命を探りあて、今自分たちが孤独でないことをたしかめ合おうとする瞬間、熱にあたためられた傷口があらたに疼き出すように、魂は苦痛の涙を流すのです。このように何気ない、しかも生きているもののとる一つの本然のポーズのなかに、作者は鋭く生の孤独の真実を把握しているのではないのでしょうか？そしてまた、このような situation を描き出すことの出来る作者は人間の生きてゆく姿をあわれみ深く見守る人であり、この孤独をいやす最も具象的な慈悲の愛を Berenice に象徴させております。この背中と膝とから子供にまといつかれ、共感の涙を流す黒人 Berenice の姿は、南部的郷土的マリアともいうべく、私どもは孤独で無力な Frankie が必要とするのは、この Berenice のがつしりした膝であることを、Frankie に得られぬ心の平安はこの膝の上にあることを納得させられます。

このようにゆたかな人間愛は、短篇 *Madame Zilensky and the King of Finland* において、自分の内に非現実な虚偽の世界を組み立てて、それを信ずることによつて僅かに自己崩壊から免かれている Zilensky 夫人に対して、この嘘をすつば抜こうとする自分に殺人者を感じ、あえて之を為し得ない Brook 氏の慈愛となつて現われます。また *A Domestic Dilemma* においては、酔払いの妻をもつた Martin が母親代りになつて、子供たちを入浴させ、柔かい子供たちの体を愛撫しながら感じる苦痛に近いまでの愛情となつて現われ、さらにこの愛は、ベッドで安らかに寝入った酔いしれた妻に対しても、悲しみと欲望を混えた愛憐の情となつてうつ

って行くのです。

As Martin watched the tranquil slumber of his wife the ghost of the old anger vanished. All thoughts of blame or blemish were distant from him now. . . . Careful not to awaken Emily he slid into the bed. By moonlight he watched his wife for the last time. His hand sought the adjacent flesh and sorrow paralleled desire in the immense complexity of love.¹

McCullers の作品のなかで力強い 肯定的要素となつて、読者に救いと光明を感じさせるのは、このような慈悲に近い人間愛のゆたかさ、人間へのしみじみとした共感に外なりません。Tennessee Williams をして “The depth and nobility of its compassion were so palpable that at least for the time being the charge of decadence had to be held in check.”² と評せしめ、黒人作家の Richard Wright をして “the astonishing humanity that enables a white writer, for the first time in Southern fiction, to handle Negro character with as much ease and justice as those of her own race.”³ と感動させたのは、上述のような人間性への共感と愛の信念とであり、これが McCullers の作品に精神性の高さをあたえ、否定的な孤独観の暗さから作品を救っているのです。

結 語

孤独は McCullers が身をもつて味わいしめた問題であり、彼女自身の内的困難でありました。この極めて卑近でありながら、無限に宏遠でもあつて、解明の困難な主題の価値を決定するものは、この主題に立ち向う作者の誠実性と内観力のふかさとであります。浅薄な作家によつて扱われれば、この主題はどこまでも浅薄なものとなり、その態度も感傷性に堕したり、妥協や独善が混つたりするでしょう。けれど McCullers は、孤独という

¹ McCullers, “A Domestic Dilemma,” *op. cit.*, p. 127.

² Williams, Tennessee, Introduction to “Reflections in a Golden Eye,” New York, Bantam Books, 1958, p. x.

³ Kunitz, Stanley J, and Howard Haycraft (eds.), *Twentieth Century Authors*, New York, 1950, p. 869, quoting Richard Wright.

人間の本質的な条件に対して、曇らぬ眼をもつて肉迫する realist であり、この真実を作品の中に再現する態度にいささかも妥協を許してはおりません。従つて、作品が時として否定的な、又 pessimistic な様相を帯びることも止むを得ず、また主題の描き方についても、irony や wry humor によつて表現されることもあります。けれど、これは作者が人生のきびしい真実に向うときの徹底した客観性と、認識のふかさが、人間の孤独から逃れようとする懸命なあがきや、恐怖や混迷や錯誤に対する皮肉となつて現われるのも自然であり、その根柢にある作者の人間や人生への態度は、不信や冷酷な cynicism ではなく、人間一般の無力さや弱さに対する compassion にあることは前に述べた通りであります。これについて、Donald Richie 氏は「McCullers 夫人は...両者 (Hemingway と Steinbeck) よりもさらに入念な作家であり、遙かにふかい内観力をもつて自分の力を統御する。その結果、感傷性はなく慈愛がある。いつわりの pathos ではなく、そこには irony が生れる。」¹ と適切な評を下しております。

McCullers は、生のきびしい条件の下に生きてゆく人々の姿を観察するにつけ、彼らをいとおしまずにはおれないのです。従つて彼女が最も関心を寄せ、思いやりをもつて描くのは、肉体的精神的に何かが生活から欠如していて、正常な生の communication を持ちえない人々、即ち啞つんぼや、せむしや、すがめ、又は性的不能者のように不具畸形の人々、あるいは精神薄弱者や、異常神経の持主、異常性格者などであり、黒人や芸術家もその対象となつております。これらの人々はそれぞれの意味で「閉された世界」の象徴となつており、現実社会から孤立し、正常な自由な自己表現の道を阻まれた人々であります。McCullers がこのようにいわば「孤独」の極限におかれた人々をえらんでいるのは、これらの人々の切実な要求に托して、この社会における人間の、人格的な communication, そして愛の欠如を強調しようとする意図に外なりません。そしてまた、これらの一見異様なデフォルメされた人々の群像は私どもと無縁な存在として眺め

¹ Richie, Donald, 前掲、一〇三頁。

られるべきではありません。私ども現代の人間は、このような姿の人々を自分の内に住まわせているのではないのでしょうか？ 何故ならば、これらの人々は「閉された世界」——“孤独”の象徴であると同時に傷つき歪められた人間の内的生活——“frustration”の象徴でもあり、この二つの現象は現代の文明社会に生きる人々が、大なり小なり直面している精神的困難だからであります。このことに思いいたるとき、彼らは私どもに無縁な存在であるどころか、文明に抑圧された現代的人間の caricature として呼吸をしていることに気づかされます。

このように寓話の形式や象徴の駆使によつて主題に重厚さと暗示性をあたえ、普遍的課題としての孤独のみならず、現代生活のなかに巣くっている病根としての孤独の様相をも合わせとらえて来ている McCullers の力量は、彼女が凡庸の域をこえた芸術家であることを示しております。

附記。この小論の中には、「McCullers とアメリカの孤独」という章を加えるつもりでしたが、紙数の都合で省き、稿を改めて本誌に掲載する予定です。

Bibliography

- McCullers, Carson, *The Ballad of the Sad Café*, Boston, Houghton Mifflin Co., 1951.
McCullers, Carson, *Reflections in a Golden Eye*, with an Introduction by Tennessee Williams, New York, Bantam Books, 1958.
McCullers, Carson, *The Heart Is a Lonely Hunter*, translated by Yuko Eguchi Tokyo, Arechi Shuppansha, 1958.
McCullers, Carson, “The Vision Shared”, *Theatre Arts*, April, 1950.
Richie, Donald, “Three Minor Novelists”, *The Trends of Contemporary American Literature*, translated by Shozo Kashima, Tokyo, Eihosha, 1956.
Brown, John Mason, “Plot Me No Plot”, *Saturday Review of Literature*, Jan. 28, 1950.
Anonymous, “Human Isolation”, *The Times Literary Supplement*, No. 2685, July 17, 1953.
Kohler, Dayton, “Carson McCullers: Variations on a Theme”, *College English*, Vol. 13, No. 1, October, 1951.
Kunitz, Stanley J. and Howard Haycraft (eds.), “Carson McCullers”, *Twentieth Century Authors*, New York, The H. W. Wilson Co., 1950.
Kunitz, Stanley J. (ed.), “Carson McCullers”, *Twentieth Century Authors: First Supplement*, New York, The H. W. Wilson Co., 1955.
Warfel, Harry R., “Carson McCullers”, *American Novelists of Today*, New York, American Book Company, 1951.